西鶴文学地図

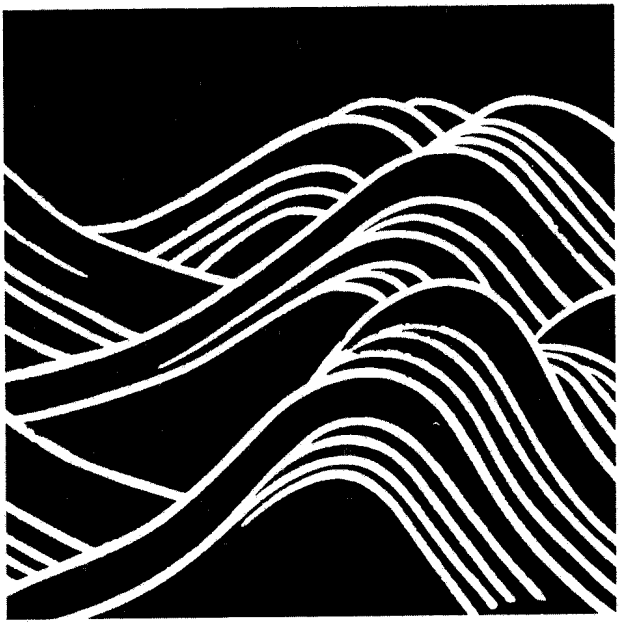
大谷晃一

鎗屋町　玉造　奈良
八軒家　御堂前　伏見
天満天神　新町　島原
北浜　道頓堀　中京
中之島　住吉
錫屋町　堺　嵯峨野
生玉　伊丹　上本町誓願寺

鶴鶴学学地図

大谷晃一

鎗屋町　玉造　奈良
八軒家　御堂前　伏見
天満天神　新町　島原
北浜　道頓堀　中京
中之島　住吉　嵯峨野
錫屋町　堺　上本町誓願寺
生玉　伊丹



編集工房ノア

大谷晃一（おおたに・こういち）
一九二三年大阪生まれ。関西学院大学法文学部卒。朝日新聞大阪本社編集委員を経て、現在、帝塚山学院大学教授。著書に正、続『関西名作の風土』（日本エッセイスト・クラブ賞受賞）『おんなの近代史』『生き愛し書いた―織田作之助伝』『手仕事のおんな』『評伝　梶井基次郎』『評伝　武田麟太郎』『表彰の果て』『人の居る風景』『楠木正成』『上田秋成』『大いなる坂・蓮如』『井原西鶴』『石山本願寺の興亡』などがある。全業績により大阪芸術賞を受賞する。

西鶴文学地図
一九九三年一二月二〇日発行

著　者　大谷晃一
発行者　涸沢純平
発行所　株式会社編集工房ノア
大阪市北区中津三―一七―五
電話〇六（三七三）三六四一
FAX〇六（三七三）三六四二
振替大阪四―三〇六四五七
印刷製本・日本電植
©1993 Koichi Ōtani
0095―9324―764r
不良本はお取り替えいたします

西鶴文学地図　目次

I
西鶴文学地図
鎗屋町　六
八軒家　一四
天満天神　二三
北浜　三〇
中之島　三八
錫屋町　四六
生玉　五三
玉造　六一
御堂前　六九
新町　七六
道頓堀　八四
住吉　九二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

堺　一〇〇
伊丹　一〇八
奈良　一一六
伏見　一二四
島原　一三三
中京　一四〇
嵯峨野　一四八
上本町誓願寺　一五六

II

西鶴対芭蕉　一六六
西鶴と鬼貫　一八二
どうして一代女を書いたか　二〇〇
西鶴に何を学ぶか　二〇四
「西鶴」作法　二一八

III
年譜井原西鶴伝　二三六
後書き　二七二
［参考文献］　二七三
［初出一覧］　二七三
［著書目録］　二七四

装幀　森本良成

I

西鶴文学地図

鎗屋町

西鶴は大阪の人である。

このことだけは疑いない。だが、あれほどの文学者でありながら、その実の生涯は霧の中にある。まず、大坂のどこで生まれ、どこに住んでいたか。その探索からはじめよう。

「西鶴　井原氏……鎗屋町の人」と『誹家大系図』にある。「井原西鶴の事　浪花鑓屋町に住す」と『年代著聞集』は書く。「鑓屋町　井原西鶴」と『難波すゞめ』に見える。鎗と鑓の字が使われていた。

大坂の鎗屋町にいたことは、間違いない。いま、大阪市中央区鎗屋町一丁目になる。ところが、あの膨大な作品の中には土地の実名がふんだんに出ているのに、鎗屋町の名はない。彼ほ

ど、自分を語らなかった作家はいない。鎗屋町で生まれたかも断定できない。

花ぞ時元日草やひらくらん

こんな彼の句がある。延宝八年（一六八〇）以前の正月に詠んだ。侘しい庭に、福寿草が時を守って元日に花を開いたという。これが鎗屋町の草庵であろう。乏しい資料から、わずかにこんな情景が浮かんでくる。

路地の奥の草庵住まい

彼は商家の生まれだった。しかし、どんな商売だったのかも、分からない。その店はこの鎗屋町にあった。おそらく、両親は早く死んだ。寛文五年（一六六五）には祖父も失った。彼は数え二十四歳だった。当然、家業を継がねばならない。だが、彼に商売をする気がなかった。店は手代に譲って、自分は俳諧をやりながら自由に世を送りたい。そこで、店の奥の路地に引っ込んだ。隠居所だったか。昔の大坂には、表通りの店の横を入る路地が必ずあった。

彼の代表作の『好色一代男』の世之介（よのすけ）は、金銀を蔑視している。作者が金銀を命とする商人の家に生まれたからこそ、商売をきらい、金銀を俗とする気持ちをも持ったのだった。

やがて彼は妻にも先立たれ、盲目の娘ひとりを手元に置いて気ままに暮らしている。

中には何も見えぬ草の屋
太鞁（たいこ）の番屋明すくる空
西方十畳次の間八畳

廉屋敷諸道具ゆつる庭の花

これらは、妻を追善した『独吟一日千句』の中の句である。庵の間取りや、大坂城内から時報の太鼓が聞こえてくる様子が知れる。

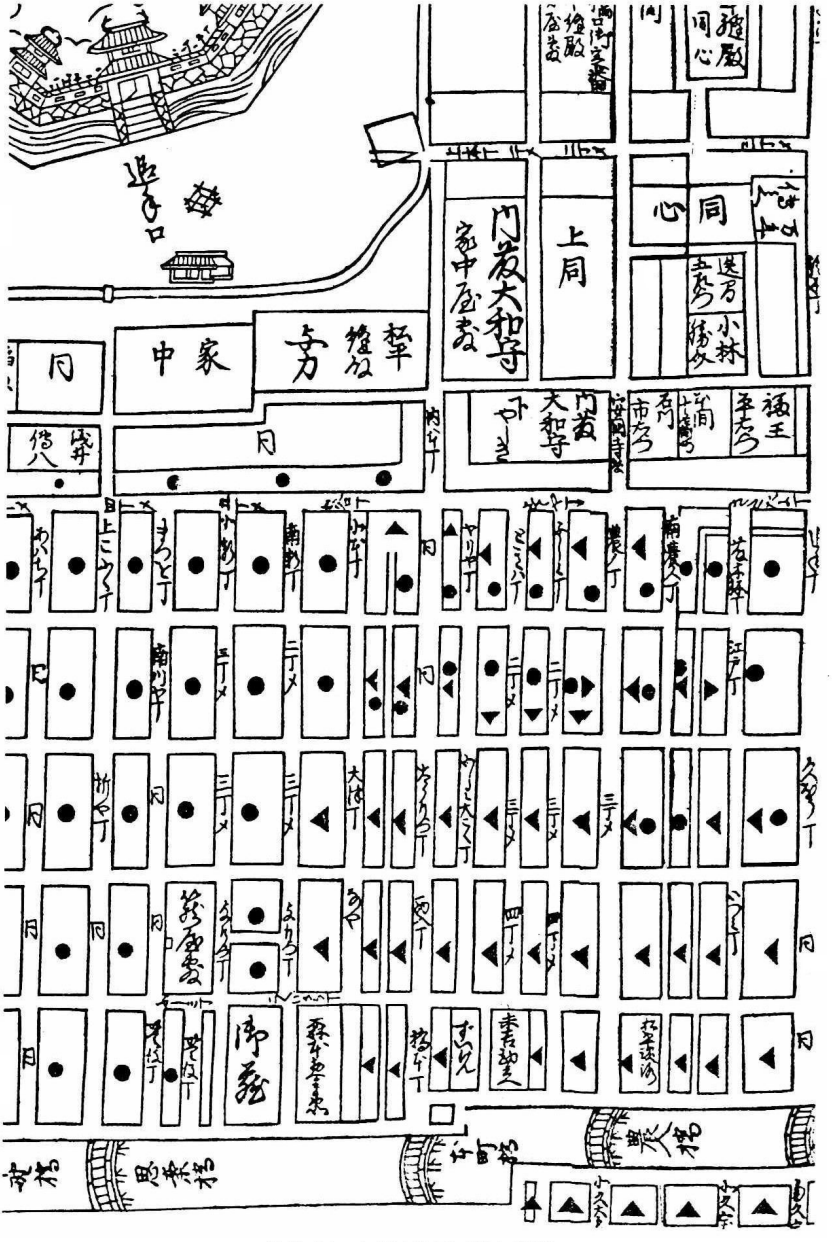
さて、その鎗屋町とはどんな町だったのか。豊臣氏が滅亡した。徳川家康は焼け跡の大坂に外孫の松平忠明を封じ復興に当たらせる。その目鼻のついた元和五年（一六一九）七月、二代将軍秀忠は忠明を大和郡山に移して大坂を天領にした。伏見城を廃し、大坂に城代をおく。

このとき、秀忠の命により伏見八十余町を大挙して大坂に移住させた。落ち着き先は、上町をはじめ玉造や船場である。上町にはすでに町家があって、空き地に町をつくる。その一つが鎗屋町である。伏見からきた者には、御用達の商人や、城大工と配下の職人もいた。彼らは徳川家と何んらかのかかわりをもっていた。

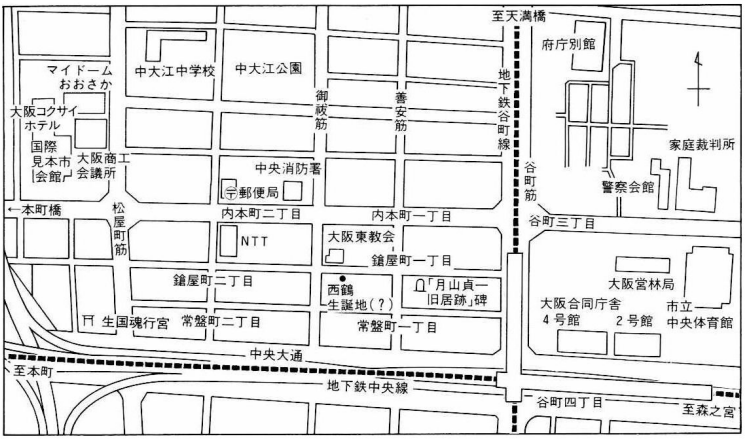
翌元和六年、幕府は大坂城の再建を触れ出した。西国の大名を動員し、十年の歳月を費やして寛永六年（一六二九）に完成した。西鶴が生まれた十三年前である。秀吉のよりはるかに壮大で、いまの大阪城の規模になった。

鎗屋町も、はじめは伏見鎗屋町と呼ばれた。もともと刀剣を業とする町だった。町はその後も発展し、西鶴誕生の前年には、町内にあった塩や味噌の番屋を郊外の鳴野村へ移した。番屋は倉庫のことである。元禄のころは、家の数が四十一軒だった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c



貞享四年　大坂大絵図（清文堂刊）



武士に近い町人の町

西鶴の父祖も伏見からきた。刀剣類を商う町人である。元は武士の出で、姓を平山という。井原は母方の姓らしい。有力ではあるが、これも一つの詮索にすぎない。

延宝元年（一六七三）のころ、鎗屋町にまた刀鍛冶がふえた。近江守助直、丹後守直道、備前守祐国らである。彼らは国司受領（ずりょう）の銘を許され、守を名のっていた。隣接の内本町や伏見両替町などに鍛冶職人が集まっている。いま、大阪市中央区内本町と常盤町。上町は職人の町になり、商いは多く船場へ移ってゆく。西鶴の店も傾いて行ったに違いない。

本町通りを東へ、本町橋を渡ると内本町である。豊臣時代は城内の三の丸だった。その一つ南の通りが、鎗屋町である。松屋町筋と谷町筋との間になる。御祓筋（おはらいすじ）から西の、いまの鎗屋町二丁目は当時は伏見大黒町というた。のちに小倉町となり、明治になって鎗屋町に入った。

東へ行くと、谷町筋に出る。貞享四年（一六八七）の『大坂大絵図』によれば、その向かいが、内藤大和守重頼（しげより）の下屋

鎗屋町一丁目と御祓筋との交差点から東を見る

敷になっている。当時の大坂城代だった。いま、中央区法円坂町。

元禄のころ、大坂の人口は三十万を優に超えていた。その中で、武士はせいぜい千人しかいない。大坂では、町人が大手を振って歩いていた。だが、鎗屋町かいわいは割に武士の姿を見かけた。しかも、先祖が武家だった。だからこそ、西鶴は町人を客観的に冷徹にながめることができたし、武士にも関心をもてた。これが、近世の大坂における鎗屋町の位置だった。

今も、ごたごたと人臭い

さあ、西鶴の家はどこにあったのだろうか。御祓筋から谷町筋までの間の鎗屋町通りにしぼられた。いまの一丁目になる。その御祓筋を東へ入り、南側の二軒目だという言い伝えがあるという。その今の鎗屋町あたりを歩こう。

御祓筋に立って東を向く。南側の手前の角が居

酒屋・うお洲、次は鎗屋町ハイツで一階が織物卸しの光綿実業、続いてプチロイヤル谷町で一階はみの源という酒屋の倉庫である。いずれも五階建て。鎗屋町一丁目三の四か五になる。この辺が、西鶴の住居跡らしい。その東隣は岡本ビルで一階がカフェ・ド・ルシール、次はヤリヤマチビルで二階には谷町ダンスホール、続いては昭和ビルで、一階はおふくろの味・はなふさ、食事喫茶・ほおずき、二階には麻雀クラブ・平和、その次が駐車場である。

向かいの北側は、角が日本基督教団大阪東教会で、次はミスタービルで三階に痩身、美顔、脱毛のエステティックがある。

ごてごてした大阪の町である。雑多な小問屋が多い。商売の町には違いないが、船場のような活気があるわけでない。ビルの上層は、マンションである。戦前までは、表は店家や仕舞屋があり、その裏に棟割り長屋がひしめいた。こんな町が昭和の空襲で焼け、路地も長屋もなくなった。裏の長屋が上階に移り、マンションになっただけである。相変わらず、人臭い。

南側をさらに東へ行く。善安筋を越える。珈琲・森元からはじまる。谷町グループ来客専用駐車場の小ビルの隅に「月山貞一旧居跡」碑が立っている。幕末から明治にかけての大坂新刀の名工である。やはり、鎗屋町は刀鍛冶の町だったという名残がここにある。文学の西鶴の碑がなくて、刀工のがあるのも大阪的である。

大阪市獣医師会、育英ゼミナール、書道教室などが並び、鎗屋町一丁目が終わる。同じ通りの最後の小ビルと中ビルの二つだけが谷町三丁目になり、広い谷町筋に出る。

鎗屋町一丁目の通り

人も車も、そんなに通らない。そこへ、わらび餅売りの声が聞こえてきた。いかにも、懐かしい。見ると、小型ライトバンだった。呼び声も、スピーカーから出ている。

谷町筋は車の波が駆ける。手前の歩道を左へ折れる。すぐに、谷町三丁目の交差点である。ややこしいことに、そこに大阪地下鉄の谷町四丁目駅の三号入り口があった。

八軒家

天満橋八軒屋なりと吟じあげ句、南無天神ばしにひゞきて、感応うたがひなくこそ

三十石船の船中で、西鶴は『独吟百韻』を詠み上げ、最後にこう書き加えた。

西鶴が京都伏見から八軒家に帰ったのは、寛文七年（一六六七）夏四月のことである。彼は数え二十六歳だった。

船は毛馬で中津川と分かれて南へ下る。これが当時の淀川の本流である。大川と呼ばれた。中野と源八を行き来する渡しが横切ると、左手が桜宮である。正面に、大坂城が見える。川崎の渡しのあたりで、船は右に大きく曲がる。大和川を合わせ、天満橋をくぐる。

ここに後世の都会の芽があった

左岸の天神橋にかけてが、八軒家である。西鶴は屋の字を使う。なだらかな石段の多い浜が船着き場になっている。船宿がずらりと軒を連ねて、客引き、女中、物売り、それに旅人や馬方や船頭たちが群がる。荷積み、船賃集めで口々にかしましく、昼夜を分かたず騒々しい。大江の岸とか渡辺の津ともいわれたが、そのころは八軒家の名の通りがよい。往古、八軒の人家がありその名が起こったという。いま、大阪市中央区天満橋京町から北浜東、である。これが

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com